

創作と美：プラトンの饗宴篇の構成をめぐる試論

浜田，ひろ子

<https://doi.org/10.15017/1397679>

出版情報：哲学論文集．19，pp.31-45，1983-09-20．九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

創作と美——プラトンの饗宴篇の構成をめぐる試論——

浜 田 ひろ子

序

この対話篇においては、七人の語り手が、〈美への憧れ〉という、神が人間の魂に生じさせる愛をめぐる、さまざまな立場から検討することになる。六番目の語り手ソクラテスは、愛の終極目的を提示した。彼の議論が招来した神話の教説によると、愛のもたらす至福は、美そのものを観想し、偽りのない徳を行ない、生きるに値する生を実現するという、美の学びの中にある。

一方ソクラテス以外の語り手達は、それぞれの立場から、この美の学びにかかわっている。人格の純一と社会の成立と世界の完成に照応する神的な美に鑑みて存在全体の秩序・統一を実現する創造活動に、かれらは人生の究極目的ともいえるべき価値を見出すのである。神と人との間で数々の偉業が実現されてゆくというかれらの讃美が、かれらが美という言葉に託しているものと、かれらの語る立場との関わりについての探究へと方向づけられ得るものであるならば、かれらはソクラテスから美の教えを授けられるまでもなく自分から学び始めている筈であつたろう。

しかし実際の所ソクラテスは、かれらのさまざまな意見を論理的検証によって決定的に卻^よけているし、自らの語る立場とかれらの語る立場との違いを強調している。従ってかれらの話は、美の教説として完成し得たソクラテスの話の存在意義を際立たせているに過ぎないかのようにさえみえるのである。

ただし本篇におけるソクラテスの談話と問答に注目してみると、ソクラテスはかれらの話そのものを否定し去るというよりも、語るることによって自らの立場を示したかれらが本当に語りたかったことは何であるのかということをかれらに考えさせようとしていることに私達は気附くのである。

このように、饗宴篇が作品としていかなる構成のもとに完成されているのかということをめぐるのはさまざまな問題が生じてくるのであり、そのいくつかについてここでは考察する。そしてそのような構成のもとにこの著作の中で示されている人間の思考と美との結びつきのありようを、創作と美をめぐる普遍的な問題として、出来うる限りあとづけてみたいと思っている。

—

作家アガトンの家に集まり、エロースを讃える話をして互いに饗応し合った人々の、ことばの饗宴は、ソクラテスの弟子アポドロソスによって物語られている。アポドロソスはソクラテスとの出会いによって、「どこであろうとどこへでも走り回ってそれでいて何ごとかをしているかのように思い込んできた（一七三A）」おのれを知り、かくして「何ひとつせずいながら何ごとかをしているかと思っている（一七三D）」のではないかという問いに取り憑かれている様子である。彼は、ソクラテスの愛智の語りと行ないにのみまなざしを向けていると称する現在の自分の心によびさまされる語りだけを、語るに値することとして、語り伝えようとする語り手であるといえるであろう。このアポドロソスの報告によって、エロースを讃美す

る語り手がまず五人登場する。

(1) 愛の神の力に動かされた人間の、美を求め醜を避ける勇敢な行動が、神々に嘉される場合の幸福に言及するパイドロス。
(2) 愛の神を天上の神たらしめる神性と、人をよき人たらしめる徳質^{ἀρετή}とを類比的にとらえた上で、天上の愛を讃えるパウサニアス。

(3) 愛の神の持つ力の中で、秩序と調和をつくりだす力の働きに注目し、人物・社会・世界の存在の完成にかかわるエロースを讃えるエリュクシマコス。

(4) 太古の完全な姿を人間に与える神は愛の神をにおいて他にはないと断言するアリストパネス。

(5) 愛の神自らが、若々しく美しい姿とすぐれた智徳にめぐまれた一番幸福な (*eûdaimonēstator* 一九五A) 神であると、絶賛するアガトン。

かくの如く最初の五人の語り手達は、人が何事かを成就する幸福に事寄せて、神エロースを讃美しようとしている。こうしてエロースという神は、神々の一員として永遠に美しく善く生きる存在でありながら、神々のように生きたいと願うのみである人間の現実を反映しているという、奇妙な存在として示される。

六番目の語り手であるソクラテスは、人々が実際には美への愛求の欲念として捉えている筈のエロースの姿そのものをみきわめようとする。愛求という行ないは何ゆえの行ないであるのか、即ちその行ないをその人の中で在らしめているのは何であるのかという探究にソクラテスは進む。ディオティマという人物との問答において、人が美を求めるといふその美が善におきかえられる(二〇四E)のは、美を求めて生きる人間のいわば生きるかたちを顧慮するしるしであったといえるであろう。

人が「善きものを永遠に我がものとする」⁽¹⁾ために「美における産出」⁽²⁾を行なうのだという教説をソクラテスが紹介する場合、人間とは、死すべき生きものであるがゆえにたましいとからだのすべてにわたって時々刻々生れかわり続ける存在であ

ると、とらえられており、その生れかわりを守る女神には美カリスという名前が与えられている。つまり人と美との結びつきが宿命的なものであって、生み出し生まれ生き続ける命の働きの中に美への憧れが根ざしているのだと、考えられている。この憧れが〈美をみる〉学びと一つになり、〈美をみる〉ことが〈美が美である〉所で立て直されるそのとき、エロースは人が本當の意味で人として生きる機縁となりうるのである。

美をみる学びは、法律習慣学術知識のすべてにわたって美しいと語られるものに関して美を正しくみとおす力の働きを、⁽³⁾みる自分の中に全く新たによびさましてゆく上昇の過程においてのみ可能となるのであり、美しく在ることの真実即ち「美それ自体」⁽⁴⁾へと正しく導かれることによって「美の学び」⁽⁵⁾として遂行される。ここで美の真実にふれるということは、徳ある行ないを人々の間に実現する人間が、限りなく神の存在に近づいてゆく幸福を意味している。人間が、現在の幸福を求め未来の幸福をねがって生きてゆく他はないということ、神々と人間との隔たりは大きいものであることを強調しつつソクラテスは、人を神に繋ぎとめる力の働きに注目するのであり、その働きの中にダイモン・エロースの存在を認めるのである。

二

エロースを讃える六つの談話について研究家達は、大旨ソクラテス以前の話を非哲学的としてソクラテスの話とは対立させて捉え、暫々哲学者と弁論家との対決をここに読みとろうとしてきた。又たとえばローゼンが指摘し、ガスリーが認めているように、ここで集められた話は、相互に組み合わせられて哲学の陳述をなすとは言い難く、弁論術の作例が並べられているかのような印象を与えている。⁽⁷⁾

たしかに一九八D—一九九Bを読むとソクラテスは、彼以前の語り手の語り方はわからなくても語ってしまふ語り方であり、わかっていて語る自分の語り方と混同さるべきでないという風に主張して、人々の語り方を拒斥する語り手として話を

始めようとしている。又それまで語り手達は代る代る聞き手となり時には学び手となる（例えば一八九D）と称していたが、ソクラテスは二〇一D―E以降において、或る智者から教えられた所に従って自分は語ってゆくのだという設定のもとに、語り手自身が聞き手であり学び手である聞き伝えの場面をより明確にする。恰も人々と共に何か重大なことを、言説の提示によって物語り問答によって方向づけてゆくのであるかのようにソクラテスという人物は振舞うのである。

ソクラテスの論理的検証は、アガトンの話の、「何を讃えるのかを明らかにして語る（一九五A・一九九C）」というその「何」を実際に明らかにし、その検証に基づいて、アガトンがエロースに与えたイメージや美名をくつがえしてゆく。人々は、人間が何事かを成就することに事寄せて、神エロースを讃えてきたのであるが、アガトンは、美しく為されつくりだされる事柄のその美をエロース自身に投影しエロースを美化していた。そしてその美は、場合によっては、かれら自身が実現しようとしている事柄をめぐってかれらが顕揚しようとしてきたものの反映ですらあった。従って、アガトンが立派に語ったのだという風に、アガトンの語りの美に賛同を示すことは、かれら自身の現実を祝福し正当化することでもあった。本篇においては、公共行事としての詩作に優勝したアガトンが、自らの家で、友人同士が集まりの間で分ち合おうとする幸福と、ソクラテスの弟子達がソクラテスの言行を語り伝えることによって示そうとしている愛智者の幸福とが交錯する過程において、美の問題が⁸泛びあがってくるのである。アガトンはソクラテスと問答を行ない、「そのものの何であるかということを示す（一九九C）」「それがまさにそれとしてあるというそれ自体（一九九E）」などの言語形式を真にわがものとすることによって、自分が善美者の幸福の形を描き出そうとしてきたという事態に改めて直面するのである。

即ち、人が美しいものに思わず眼を向けるという、美しいものと眼との対応関係が、魂と〈美それ自体〉との間に考えられるとするならば、そしてその対応が神と人とを近づけ人を人たらしめているとするならば（二二二A）、善美者の幸福を美しい光景のように思い描いて人間の現実と美しいイメージとを結びつけ、みたされみちりたその美の現前に賛同を示すことは、いわば許されざることであろう。しかしこの種の、美しくみせかけていると思いいく愚かさを人間に悟らしめるもの

は、《美それ自体》に正しい方法で近づいてゆく者の精神的生長（二一〇D）であつて、現状の非美に眼を向けるいわゆる反省ではないであらう。美の学びへと向かう人間は、悔いるということが美をさがなうことと一つであるといつてよいほど、エロースの力すら超えた美の力のもとに身をおいているのではないだらうか。

アガトンがソクラテスと共に眼を向け、ディオティマがソクラテスに説きあかした人間の現実と、ソクラテスが自らの課題として受けいれている恋愛修行の秘儀の始まり（二一〇A5よりB6まで）とを重ねて読むことが許されるならば、美の現前に関する美の学びをたとえば次のように理解することが出来るかも知れない。（以下直訳ではないが引用の形で示す。）

正しい指導と監督のもとで探究を始めた者は、ひとつの肉体を恋して思いを遂げようとするとき、愛し求める美の現前を、自らのロゴスにおいてひとつの「神的なるものとの調和」を見出す経験⁽⁹⁾によって、実現する。数々の美しい肉体のすべてにおいて美しいと語られるその美に、美しい肉体のすべてにわたって同一である美を学ぶそのとき、姿形の美を機縁として、美に関する新しい展望が精神に開かれたのであり、ひとつひとつに執着する恋ではなく、人が美を確りとみきわめているそのすべてにわたって人がみとおす《美》の力に人は動かされている。美しいものをいとおしむ愛着とはかくして……

美しいものへの愛着とはかくして、美が現前するというその現前の意味を求め、美をみるという事態が、今ここで生きていることの証であるような《時》を生きようとする探究へと、変貌するであらうことが予想される。美しいと観ることに何があるのかを正しくみとおすその行程は、ともかく見ているという自分の中で、見る自分が全く新たにびびまされてゆくことである。⁽¹¹⁾そのとき眼前の光景がより完全なものに変質するというわけではなくて、失われる時のままに滅びるものをあがなう途が⁽¹²⁾魂にひらかれてゆくのであり、美の観想そのものがいわば新しく時を創りだすのである。

そのこの意味を七番目の語り手アルキビアデスの語り方からも考察してみよう。彼のいう、ロゴスの中にヌースを発見

する（二一五E・二二二A）ことも、見ることが表現であり実現ですらあるような美の経験であり得た筈だ。しかしその経験を生きることがアルキビアデスにとって、無為に老いる（二一六A）ことに他ならなかったようである。

彼はソクラテスという人物の神的な美しさを垣間見た（二一六E5—二一七A2他）時の感動を人々に伝えようとした。しかしその美しさを確りと見届けたと主張するだけの資格が自分にはないということも同時に告白せざるを得なかった。一体自分の中にある何が自分にそれを見させたのかという問いかけを、外から彼は与えられはした（二一九A）が、その「何か」が彼の中で養われてゆくことはなかったのである。

確かに、神的な美を人の姿の中に認め、神的なものの人的なるものにおける調和を美の典範とすることは、時として可能であるかも知れない。その〈調和〉はアガトンのエロース像の如く優婉であるかもしれないし、アルキビアデスのソクラテス像の如く荒唐無稽であるかもしれない。しかしそのような美を語り伝えようとする人は、一体誰に何を渡すことになるのだろうか。

ディオティマの語る美の学びの階段を振り返ってみるならば、美の現前によって魂がみだされることを望む人間は、美のあかるさの中に自らのまなざしが純化されるに至るまで、美との出会いのすべてを、美の永遠に一なる姿へと導くことにより初めて美をみる幸福に近づいてゆく。美を観ることに⁽¹³⁾ついて新しい展望をひらいて美に近づき、⁽¹⁵⁾為したことに申しひらき（二八九B）をして⁽¹⁴⁾酬（二二六B他）から遠ざかるとき、美という価値は獲得ないし享受され得るのである。たとえ言葉と行動が間違っていないくても、その正しさをあかしだてることが出来るまでは、語られ為された事態は明らかに⁽¹⁴⁾な⁽¹⁵⁾ったわけではなく、人と知識との存在世界における結びつきは未だ完全ではない。哲学の探求の持つ一つの意味はそこにあるのだと、ソクラテスは納得している（二〇二A・二〇四A）。かくなる探求者である限り哲学者も、美へのエロースを生きるダイモンと同等であって、何事かを達成してその成果に安んじて暮らす生活とは無縁なのである（二〇三E）。

つまりアガトン達に対してソクラテスが守っている立場は、ひとつの美の現前をそれだけとりだして考える限りにおいてたとえその現前が十分に明らかであるとしても、美をみる幸福が人間の幸福としての意味を未だに持ち得ていないという洞察に基づく立場であるといえるであろう。

三

さて以上のように、ソクラテスの話は、エロースにとらえられつつ恋を修める人間が、数々の美において美しいと語れるその美に、数々の美のすべてにわたって同一である美を学ぶべき美の学びの階梯を、ことばの饗宴に参加しつつその議論の中に示し、かくして内容的にも形式的にも哲学の語りにもふさわしく完成されている。ソクラテス以前にエロースについて語った人々の話は、美の学びへの行程を示しうるほどの、固有の論理と価値体系を有する話であるとは考えられない。しかし、かれらの話がソクラテスの話のように完結しえなかったとしても、ソクラテスの話がかれらの話と共に完結しているこの対話篇において、〈美の学び〉が提示されたということそれ自体の意味については、人々が讃えてきた徳の栄光という事柄との関連において、今一度考察を加えるべきであろうと思われる。

そもそも、ソクラテスの前に登場する五人の語り手とは、二人の教養人、一人の医者、二人の作家で、文芸に並々ならぬ関心を寄せている点で共通している人々である。かれらにとってその文芸の目的は、美しく善く生きるための教養、即ち、良き市民として世に出るための教養を、身につけるということであったといえよう。ノモス（法）やコスモス（存在するあらゆるもののととのい・ほどあい・折り合い・つつしみ）を讃美するかれらは、人間がかかわってゆく事柄の何らかの領域の中に、人間の一生の課題を見出すのであり、その課題の達成に欠くべからざるものとして、調和の法則や合法的慣習を尊重せざるを得ない。こうしてかれらは法習学識に基づくそれぞれの立場から、人物・社会・世界の完成された姿に注目して語

り、その美しさをおのれの美しさとするような愛の神を讃えるのである。即ちかれらが、愛の神は美しい、と語るとき、人物・社会・世界における秩序・統一をかれらは思いおこしているのである。「美への愛は美を求めて美へと向かうがゆえに世に平和をもたらした」という愛の美談が、「美への愛は美を追い求めるほど美にみたされず美に乏しい」という愛の真実にたやすく反駁される（一九七B・二〇一AB）としても、最初の文章にこめられた〈讃美〉そのものはおそらく偽りではないであろう。問題は、この讃美が誰かの「魂の卓越性の淬の高さ」（二〇八D・二〇九A）を尊ぶ誰かのフィロティミーア（名譽愛・功名心）をみたすだけのものになり果てはしないかというその一点にある。

ソクラテスの話の中で智者ディオティマは、人間のフィロティミーアのすさまじさを説明しようとして、徳行が美しく語り継がれ心に美しく語り記される追憶の不滅を崇める愛が人間を動かしているのだと語る。この愛に動かされた人は皆、徳を行ないうる器量の持主であるかのように、また実際にそういう人物であれば尚更、どんな事でも一生の仕事として引き受けてしまう（二〇八D）。この愛を共にする人々は、世に徳を絶やすまいとして、人の働きが人々の間で徳ある行ないという形を示す共同体の秩序について論じ合う。かれらの議論が互いの魂を教導するに至る時、法典その他の美しい業績がそのあかしとして残されるであろう。――かくの如きディオティマの演説（二〇八Cから二〇九Eまで）は、愛の功業を美化してきた人々の話と十分に照応していると同時に、ソクラテスの話の中心部分と緊く結び付いている。たとえば二一〇A、C、Dの *hōtous kalous* は、二〇九B Cの *hōtōu pei dōeticē xēl.* に対応していると考えられよう。

さてそこで、〈美しく為し美しく語り継がれる行ない〉についての言論が、美に〈美〉を学ぶ〈美の学び〉のための言論に続くのであるということの意味を、その続くといわれる場所に例の語り手達が実際に身を置いている次のような場合について、考察してみることが出来る。問題となっている何か神的なその行ないをめぐってかれらが心に抱くであろうような感慨は、その行ないが果たしてどれほどのことであるのかをかれらが見届けてゆこうとすることによって深められてゆくのである。しかく、その行ないが何事であるのかと問い、その何事かであることの生成にこのようにして立会う時、かれらは、

何かそれなりの美しさを漠然とでも把えてしまっているというよりは、それについて存在と認識の形を求めている何か茫漠としたそこから出発してそれ自体へと向かってゆき、それを見出さんとして探究し続けてゆくのであろう。この時、さまざまな仕方であまいと語られてゆく美は〈美それ自体〉として知られるべき美とはくつきりと対立していながらも内的な繋がりを保つ。即ち、美しく為され美しく語り継がれるというその行ないの在りかを求めてゆく認識の純化そのものが求められるべき幸福としていまやかれの前にある。その幸福へと向かって、恋を修める人間を駆り立ててゆくダイモーン・エロースの力と勇氣に対するソクラテスの讃辞が、かくして語り手一同の結論とならざるを得ない。それ故に又、神と人との間を往き来するダイモーンの存在によってすべては「それ自身がそれ自身と共に（二〇二E）」途切れることなく結び付けられるに至っている、というディオティマの神話は、パイドロスが思い描いていた、神が人の勲功を嘉するということ構図を、十分に具体化することになる。そして統一体を成立させ世界の秩序を実現する事業の中に神的な美との結びつきを求めてきた語り手達は、人から神へと〈美しく在ること〉がより良く実現されてゆく存在の秩序（世界）の、その全一性に照応関係をつくりだしてゆく美を語り記そうとしてきたのだといえるのである。

勿論かれらは、コスモスの美そのものを自らの探究において見届けることは出来ない。しかしかれらの語りがソクラテスの語りの中に互いに照応しつつ再統合されるとき、一人／＼の学びが保たれ守られる可能性が生じることになる。こうしていればかれらの語りのそれぞれが自らを明らかにし他をあがなう可能性を潜めているかのように、この書物は構成されている。本篇において、行ない（徳を修め力を尽くしたと語り継がれてゆく行ない）のための美を明らかにし美それ自体をみつめようとする愛智は、独りソクラテスの中に完結しているわけではない。コスモスへの讃美をコスモスの美に反響する語りとしてわかち合うこの饗宴において、それぞれの学びがそれぞれに保たれてゆく限り、語り手は存在のめぐみともいうべき美の力によって語り手たりえているのであり、学びの美は人々に享受されていたのである。であれば、ソクラテスの話がかれの話と共にあることは、かれらのその場限りの探究の惨めさを際立たせるばかりではなく、かれらの探究にとっておそ

らくは救いとなっていたのであろう。

四

非哲学的だといわれるかれら五人の話が、哲学的といわれるソクラテスの話と一緒に並べられているこの書物の全体を、こうしてともかく一度そのままに眺め渡してみる時、ソクラテスの話と対立し、対決を迫られる人々の話は又きわめて微妙な仕方です。ソクラテスの話を中心に統一され、ひとつの有機的な全体を成しているといえるのではないだろうか。そのことに關してはさまざまな仕方です。すでに検討してきたわけであるが、尚語りうる二、三のことを附け加えておきたい。

(1) ソクラテスの話の中の、人として死に絶えることなく、魂の働きが消え去ることなく、神と共に在るという観想の至福を語る部分(二一・二A)に、人々が語ってきた、さまざまな立場で愛の功德を積む幸福の姿は重なり合い透化されてゆく。さらに、七番目の話の中の哲学者ソクラテスの行状記が又ここに重なり、アリストパネスの有名な作品において既に完成していたソクラテスの戯画(二二・一B)すらも、独特の形で甦る。ソクラテスの姿は決して美化されることなく、しかもプラトンの志を明らかにするために必要な重味をそなえて、私達全てが人としていつしか在らしめられたその實在へと向かってゆく。恰も、今という現在の意識において一瞬にして多くのものを見るかのように、〈ひと〉の凡ゆる明暗¹⁸の協調する姿を読み手が思いおこす時、ソクラテスの言行を記念するプラトンのこの対話篇における創作は、作為への変質を免れるのである。

(2) アリストパネスは、かつてひとが完全な形をしていた時代があったという神話を作り出し、その形を取り戻す願いを叶えてくれるのが愛の神であると説明する。しかるにソクラテスの話の中でこの神話は再び取り上げ(二〇・五D)られ、ひとの形をとることが〈よい〉と思つてそう願っているのかどうかということが重大であると語られる。ここでソクラテスは単

にアリストパネスの説に異を唱えるだけではなく、アリストパネスが本当に語り始めたことが何であったかというを示している。ソクラテスと共に在る限り語り手達は、語る自分が学ぶ自分に何事かをなしている場を見出してそこで語るといふ〈創作〉を行なう語り手であらざるを得ないのである。

(3) ソクラテスは自分の話を始める前に、彼の直前に語ったアガトンと問答を行なって、アガトンの話の行詰りを認め合った。そしてソクラテスはアガトンの行詰りを受継いで自分の話を始めた。ソクラテスはアガトンの話をしりぞけ訂正すると同時に、アガトンが一体何を本当は語りたかったのかということを改めてアガトン自身に考えさせようとしている。もしもアガトンにアガトンの探究があるとするならば、アガトンは自分の学びを続けてゆく筈である。それが、アガトンにアガトンの知恵がある（一七五E）ということの意味であり、アガトンが「美しく語った（二〇一C）」ということの意味なのである。ソクラテスは、話相手の中から内なる対話者を喚び出して、在るべき問いを明らかにしようとするとき、問答の究極であるアレーティア（二〇一C）に相手の注意を向けさせて自分は取るに足りぬ夢の如き知（一七五E）の中へと姿をくらましたりもする。いわばソクラテスは、問いがどのような問いであったのかを明らかにして思考の始まりをしるしづけるその過程において語ろうとする問答者として登場している。たとえば一九四Cのアガトンとソクラテスとの、実際には途切れてしまった対話は、賢い人だと思う人の前で語る場合とそうでない場合との区別は語り手にとって何であろうかという問いの力によって、問答そのものではなくとも、読み手が問答者と共に在る場面を確立しているのである。

かくなる次第であるからこそ、読み手としては、本篇のあらゆる議論における語りの受渡しに、そして美の学びのゆくえに注目せざるを得ない。いってみれば「ソクラテスの発表した話は人々にとって一体何だったのであろうか。」「ソクラテスの語る美の学びの意味を、人が十分に納得するに至るまでの、思考と美とがおのずから結びつくその自然な結びつきが可能であるとしたら、それは何ゆえであらうか」という問いかけを保つことによって饗宴篇は、読み手をも含めた談論の輪を映

しだそうとしているのであり、本篇の全体がこうしていればもう一つの〈美の学び〉を形づくっているのだと、筆者には思われる。

結

饗宴篇という作品の成立に即して、創作と美の問題をとらえ直してみるならば、人のロゴスが美の経験を魂の全体においてよきものとして保つことが出来、人の生全体をひとたびよきものとして在らしめるということが、そのまま取りも直さず〈美しくつくられる〉ということの基本的な意味であるといえよう。即ち、人が何ものかの、そして何事かの美において、人の生全体をよきものとして在らしめる美の力に動かされ始める時、人間の存在とはひとつの謎に他ならず、その存在をへ世界」の存在における美の力への協調において見出しつつ、そこに生じている新たな調和（或いは反調和）を知ることが、プラトンにとって創作の、少なくともその一つの姿であったとはいえないであろうか。（一九八三年五月）

〔付記〕 テキストはOCT及びビュデ版を使用した。註釈書はベリー、ロバン、ドーヴァーを参照した。

―尚、松永雄二氏の論文「ある原理的なもの―プラトンの美と芸術についての思索をめぐって―」（人文書院、講座哲学大系第六「芸術理論」昭三六）、田中美知太郎氏の著作『プラトン「饗宴」への招待』（筑摩書房、昭四六）、今道友信氏編「芸術と解釈」（東大出版会、昭五一）、そして水崎博明氏の饗宴篇に関する一連の論文（福岡大学人文論叢昭五二他）に多くを負っている。（刊行順）

註

- (1) τὸ ἀγαθὸν αὐτῷ εἶναι δεῖ (一一〇κΑ)
- (2) τόκος ἐν καλῷ (一一〇κΒ)
- (3) …ᾧ δεῖ… (一一一一Α 1) …ᾧ ὁρατὸν… (一一一一Α 2)
- (4) αὐτὸ τὸ καλὸν (一一一一Ε)
- (5) καλὸν μέθημα (一一一一Ζ)
- (6) R. G. Bury, *The Symposium of Plato*, Cambridge, 1909, p. lvii.
L. Robin, *Le Banquet* (Platon, Œuvres Complètes, IV, 2 partie), 1929, p. LXX, et passim.
K. Dover, *Plato, Symposium*, Cambridge, 1980, p. 5.
- (7) S. Rosen, *The Symposium of Plato*, Yale, 1968, p. xxxvi.
W. K. C. Guthrie, *A History of Greek Philosophy IV*, Cambridge, 1975, p. 381.
- (8) ὅπως δὲ φαίνεται ὡς καλλίστος καὶ ἀριστος… τοῖς μὴ γινώσκουσιν (一九九Α) — 尚、カロカガトスとレートリケーとの不運な関係については、松永雄二氏の「知と不知」をめぐる問題」(『哲学論文集』、昭五〇) 十一—十三頁参照。
- (9) 「いまみちたりているものを自分は欲求するという語りは、いまみちたりているものがずっと先までみちたりたままであることを自分は願っている」という語りに他ならぬ (二〇〇D) 「誰であれ欲求するときは自分のものでなく現前していないものを欲求する。持っておらず自己の在りようではなく欠いているところだ何かへ」と、愛求の欲念はあるのだ (二〇〇Ε) 」
- (10) … τὰ δὲ ἐν τῷ ἀναμύρῳ δόξουσιν γενέσθαι. ἀνάμυστον δ' ἐστὶ τὸ ἀλογικὸν παντὶ τῷ δεῖν, τὸ δὲ καλὸν ἀμύρτον.
… (二〇六〇D)

(11) 松永氏前掲書(人文書院) 八八—九一頁参照。

(12) 「眼をそらさずに黙ってみつめ続けているそのあいだに、この光景は、長い睡りから醒めたかのように身を起こし、魂の眼にくつきりと輪郭をあらわにし、新たな神的な息吹きを受け、もうひとつの光景として甦る。光景は自らの魂をとりもどす。するとこの魂は私の魂に語りかけてくる。私達は互いに響き合うことを知り、魂はひとつの魂になる。光景は私の中に生き続け、その魂

の中で、私は私をとりもたず」

A. J. Festugière, *Contemplation et vie contemplative selon Platon*, J. Vrin, 1950, p. 345.

(13) αὐτὸ τὸ καλὸν ἰδεῖν εὐχαριῦν, καθάρου, ἁμάρτου, κτλ. (一一一E)・

(14) αὐτὸ καλὸν αὐτὸ μετ' αὐτοῦ μονοειδὲς αἰεὶ οὖν (一一一B) αὐτὸ τὸ θεῖον καλὸν ... μονοειδὲς καρτερεῖν (一一一E)

(15) κατανοῆσαι ὅτι (一一〇B)・ἐπὶ τὸ πρὸν πέλατος τετραγμένους τοῦ καλοῦ (一一〇D) などの語り方を参照。

(16) 「美しい」というのは何かつねに充足した経験であり、「これは美しい」という認識においてそこに高次の一性に支えられた存在の現象を我々はみているにも拘らず、まさにそのことを根拠づけ、構造づけているそれ自身を、知ることはない」

松永雄三氏【或る構造】——「イデアの離在と分有について」【再考】——「理想」五一五号、昭五一より。

(17) εἰ ἐθέλεις (二〇八C)・οἶεαι οὖν (二〇八D)・πᾶς οὖν δέξασθαι... (二〇九C) など、人々の語りとの呼応を示す表現は随処にみられる。

(18) 明暗といっても人間本性の善悪を念頭に置いているわけではなく、あくまで人間と語りとのかわりにおいて、人が持つべきロゴスを人が互いに共有するその容易と困難とを、ここでは問題にしている。本篇における πολλῆς καὶ κατῆς σοφίας πηρωσθῆαι οἶμαι (一一七五E)・καλὸς ἡγούμεναι (一九四A)・νικώμεθα ἐν λόγοις πύρτας ἀνθρώπων (一一三E) 及び τοῖς γε ἡμῶν οὐ καλὸς λέγει (一一七A)・μάλα εὐφρονικῶς... ἐλάττω (一一八D) などの語り方を参照。

(昭和五十五年本学大学院博士課程修了・美学)